

# 保育科学生に対する作文指導の目的とその結果について ——「日本語の表現法」と「保育者論」の授業を通して——

佐藤 達全<sup>1)</sup>

## About the Purpose and the Result of the Composition Guidance to the Students of Child Care Major : Through the Practice Seminar on “Japanese Writing Skills” and “A Theory of Nursing”

Tatsuzen Sato

### Abstract

As for the students entering this junior college, a kindergarten teacher and “the admiration” to become a childcare professional are strong, but their motivation to learn the professional knowledge and skills is not high.

In addition, there are much discussion on the adults and students who particularly have weak point in awareness of writing a sentences. As a matter of course, the trends and the indication “not to be able to write a sentence” have increased.

Therefore in ‘Japanese Style III’ and ‘the childrens theory’ that the writer is in charge of.

I intended to improve of the students’ writing capacity that is demanded from a children by imposing the interval reports. I also required homeworks in every school hour. I considered the actual students’ improvements while introducing their performance in this article.

keywords : Writing ability, Aversion to reading, Composition instruction, Professional consciousness, Greediness for learning

キーワード : 文章表現力, 読書離れ, 作文指導, 専門職意識, 学習習慣

### 1. はじめに (問題の所在)

本学の保育学科に入学してくる学生のほとんどが、保育者（幼稚園教諭と保育所保育士を総称した表現）になることを「子どもの頃からの夢」「あ

こがれ」と考えていて、免許や資格の取得だけを目的としている学生はほとんどいない。毎年、卒業生の90パーセント以上が幼稚園や保育園・（児童）福祉施設等に就職していることからそれは明らかである。こうした状況は、保育者の養成を

1) 育英短期大学保育学科

目的として設置されている短大としては喜ぶべきことと言えよう。

ただ、そこに問題がないわけではない。その一つが「夢」や「あこがれ」という意識が強すぎて、保育の専門家として求められる知識や技能を習得しようとする意欲が低いことである。かわいい子どもと楽しく過ごしたいといった安易な気持ちのまま保育者への道を進もうとする学生が非常に多く、子どもの体や心の発達に関する学習はもちろんのこと、発達を援助するための技術の習得に努力しようとならないのである。また、保育は目的を持った意図的な活動であるから、指導計画の策定や活動後の記録と振り返りも必要である。それに加えて連絡帳等を用いた保護者との連携も図らなくてはならない。

これらのことを考えると、「読んだり書いたり」する能力が重要であることは当然であるのだが、テキストを読む力の低下は言うまでもなく、正しい文章が書けない学生が非常に多くなってきた。近年の学生の文章表現力の低下は目を覆いたくなるほどなのである。学生の書く文章が「おかしい」と感じるようになってから10年ほどが経過している。それまでも学生の文章に問題がなかったわけではないが、その多くは「誤字」や「当て字」や「見直し不足による単純な間違い」といったレベルのことであった。

筆者の手元には平成2年度に提出してもらった2年生150人分のレポート(夏期休業中に一人あたり2000字程度で書いてもらった課題文:返却しないと伝えてあった)が保存されているが、誤字や当て字が数人に見られるものの、文章の組み立てや基礎的な表現が間違っているレポートを書いた学生は一人もいなかった。

その当時に比べると、最近は「危機的」と言わざるを得ないような状況になってきたのである。ほとんどのレポートから「て・に・を・は」が正しく表現できていない文章や主語と述語のつながりがおかしい文章や話し言葉で書かれている文章

等、何らかの問題点が見つかる。各学年で担当している200余名の学生のうち、30パーセント近くは小学生なみの文章力しかないと思われる。話し言葉が頻繁に使われるのは話し言葉と書き言葉の区別がつけられないためであろうし、その原因のひとつは本を読まなくなったことがあげられるのではないだろうか。

そこで、筆者が担当している「日本語の表現法Ⅲ」と「保育者論」では、毎週の授業終了後にその日の内容に関連したテーマを提示し、家庭学習としてレポート(400字の作文)を提出してもらうことにした。その目的は、その日の授業のふり返りにつなげることはもちろん、授業以外の場で学習する習慣を定着させること、危機的な状況にある文章を書く力を少しでも高めること、自分で考えようとする気持ちや保育者としての専門職意識を持たせること等である。「保育者論」は始めて2年目だが、「日本語の表現法」は8年ほどが経過した。そこで、その取り組みを紹介しながら学生の学習意欲やこれまでの学習の問題点について考察を行った。

## 2. 学生が書く文章の問題点

そこで、まず文章力に関する学生の実態を紹介しておこう。

### (1) 「て・に・を・は」が間違っている事例

①実習がおわり、私にはたくさんの課題を見つけてことができました。

正しくは「私は」である。「私には」とするならば述語は「課題があることに気づきました」等としなくてはならない。

②実習したことによって、自分の欠点を知ることができたので、直すように努力することやもっと多くの知識が必要だということが気がつきました。

正しくは「欠点を」「ことに」としなくてはならない。

- ③ 1週間、幼稚園へ実習をして、1週間がたち、学んだことや先生から教わったこと等をふり返ることができました。(同じ表現のくり返しもある)

正しくは「幼稚園で実習して1週間がたち」でなくてはならない。

- ④これからきちんと準備をして実習へ備えたいと思います。

正しくは「実習に」としなくてはならない。

## (2) 並列の「たり」がひとつしかない事例

- ①先生方が読み聞かせや手遊びをしているのを見て、表情や声を変えて読み聞かせていたり、たくさんの種類の手遊びをしていて、私は手遊びをあまり知らないのもっと多くの種類の手遊びを知りたいと思いました。

正しくは「先生方が……見ていると、……色々な種類の手遊びをしたりしていましたが」としなくてはならない。

- ②観察実習の経験での体験をクラスのみんなの良かった点、反省点を聞き、思いかえしたり見直すことができました。

正しくは「観察実習の体験について」「ふり返って反省することができました」としなくてはならない。

- ③年中さんは部屋の中で粘土で遊んだり外のアスレチックで遊ぶ子が多かったです。

正しくは「アスレチックで遊んだりする子がたくさんいました」としなくてはならない。  
(「多かったです」は、小学生によく見られる表現である)

## (3) 小学生の作文に特徴的な文末表現 (いわゆる「タラちゃん言葉」) の事例

- ①私はこの前の実習で、みんなの良かった点や反省点を聞いて、たくさんの人の意見が聞いて良かったです。(同じ表現のくり返しもある)

ある)

正しくは「みんなの良かった点や反省点など、たくさんの人の意見が聞いて参考になりました」等としなくてはならない。

- ②自分から積極的に動き、同じ失敗や注意を受けないように気をつけたいです。

正しくは「気をつけようと思います」等としなくてはならない。

- ③不安なことがたくさんありますが、今日ふり返って思ったことを忘れないように日々の授業と取り組みたいです。

正しくは「取り組みたいと思います」としなくてはならない。

参考までにその理由を示しておく、敬体表現における文末の助動詞「です」に接続する語は原則として「活用しない語」とされているため、文章において「良かったです」「気をつけたいです」「取り組みたいです」と表現することができないからである。「た」や「たい」は助動詞(活用がある語)であるから、接続法に反する表現である。話し言葉に用いられることはあるが、文章では書かない。

ただし、小学生の作文では許容されている。たとえば、手元に「第4回県小中学生新聞感想文コンクール：上毛新聞社主催」の入選作品があるが、そこには次のような表現が見られる。

- ①いってかざりやこふんをみてわかったこともたのしかったけれど、しんぶんでわかったこともたくさんあったのしかったです。こんどいくときはこふんのかたちをあたまのなかでおもいながらあるいてみたいです。(小1)
- ②らい年また、竹の子ほりをしたら、チョコレートソースをつけて食べてみたいです。……にんじんのパンケーキやスティックディップを作ってくれてうれしかったです。……わたしも大人になったら、じ分の子どもに食べさせ

てあげたいです。(小2)

- ③まだぼくにはわからないけれど、他の国のこともこれから少しずつ考えていきたいです。

(小3)

もちろん、次のようにこうした表現をしない小学生もいる。

- ①でも、亡くなった山本さんがしていた仕事を知って、戦争で人が死ぬことが自分達のくらしと何の関係もないことだと思っていたことが恥ずかしくなりました。(小4)「恥ずかしくなりました」とは書いていない

- ②そのために、今はいろいろな新聞の記事を読み、自分だったらどうするかを毎日勉強していきたいと思います。(小6)「いきたいです」とは書いていない

#### (4) 意味を考えずに同音の漢字を使う事例

- ①良かったことをいかし、ダメだったところを改善して次の実習に望みたいと思います。

正しくは「臨みたい」としなければならない。

- ②最初は園児の中にとけこめることができるか、大変に不安な気持ちのままのスタートでしたが、先生方が温かく迎えていただいたので、徐々に緊張と不安が消えました。

正しくは「徐々に」としなければならない。なお、この文にはもっと多くの問題点がある。「とけこめる」という可能表現に「できる」がついていることで、正しくは「とけこむことができる」か「とけこめる」としなくてはならない。また、「先生方が温かく迎えていただいた」は「先生方に温かく迎えていただいた」もしくは「先生方が温かく迎えてくださった」としなければならない。

- ③リズムが始まると顔つきが違くなり、とても真険で集中している姿も見れました。また、

新しい歌も興味深々に聞いていました。

最近は「違くなり」「好きくなり」「きれくなり」のように用い方のおかしい学生をしばしば見かけるが、正しくは「違って」としなくてはならない。また「真剣」「見られました」「興味津々」が正しい。

#### (5) 全体的に表現方法や文節のつながりがおかしい事例

- ①実習をふり返ってみると、反省するところがとても多くありました。また、保育者になるための勉強が足りないことや指導の仕方などをする必要があると思いました。

正しくは「仕方などを勉強する必要があることに気づきました」としなければならない。

- ②失敗を恐れずに、手遊びやピアノや絵本をしていけたらいいと思います。

正しくは「ピアノを弾いたり絵本を読んだりしたい」としなくてはならない。

- ③保育者になるためには、知識や技術・気配りや気づきができる人になりたいと思いました。

「保育者になるためには」と書き始めたら「人にならなければなりません」のようにつなげなくてはならない。

- ④今回の実習で失敗したことを次の実習で同じ間違いをしないように、これから学校での勉強や実習でもらったアドバイスを生かせるように勉強していこうと思います。

正しくは「次の実習ではくり返さないように」としなければならない。また「もらった」でなく、「いただいた」としないと先生に対して失礼であろう。

- ⑤良かった点では、日誌の字がきれいだと言われた子が何人かいて、私は時間に追われて書いてしまいました。

正しくは「何人かいたのですが、私は時間に追われていたので乱暴に書いてしまいまし

た」としなければならぬ。

(6) 話し言葉で書かれている事例

- ①私は、保育士の仕事がかんなんにも大変で難しいことだなんて知りませんでした。

正しくは「とは」としなければならぬ。

- ②悔しくて泣いちゃう子がいたり、子どもは本当に素直に気持ちを表現するなあと思いました。

正しくは「泣き出してしまう」「表現するものだ」としなければならぬ。

- ③子どもにとって自由遊びは欠かせないものなんだなあと思いました。

正しくは「ものなのだ」としなければならぬ。

- ④なので、ひとつひとつの授業をきちんと聞き、先生が話すことは大事な話しをたくさんするので、必要なことはメモをとりながら話しを聞くことが大切だと思いました。

「なので」は独立しては使えない言葉である。その前に言葉があって「…なので」という使い方が正しい。最近は会話で使う人が増えているが、文章には書けない表現である。また、名詞の場合は「話」と表記し、動詞の場合は「話して」のように送り仮名をつけて表記する。

- ⑤風邪のため、2日も休んでしまい、すいませんでした。

正しくは「すみませんでした」としなければならぬ。

学生の間違った文章表現の事例を挙げていくといくらでも出てくる上に、以前のような誤字や当て字といった問題では済まなくなっている。話し言葉で書く理由の一つは、本を読まなくなった結果、書き言葉と話し言葉の区別がつかなくなったからではないだろうか。正しい日本語の文章が書けない大学生が相当数いることは間違いない。

そのため、最近は実習指導をお願いしている幼稚園や保育園の先生から「実習日誌が書けない」「大学でどんな指導をしているのか」というクレームが増えてきた。日ごろから学生のレポートを読んでいると、その指摘は当然であることが納得できるのだが、だからといって正しい文章を書く力は一朝一夕には身につかないので、非常に困難な問題といわざるを得ない。しかも、このような状況が本学の学生だけでないことは、多くの大学や短大で文章表現力の授業を導入し始めたことから窺える。

### 3. 現職保育者の文章にも見られる問題点

ところが、現実には更に深刻と言わざるを得ない。それは、すでに保育者になっている人にも同様の現象が多く見られるからである（もっとも、保育者も学生だったわけであるから養成校の指導にも原因の一端があるかもしれない）。

- (1) 現職保育者が書いた実習日誌のコメントの事例

- ①これからも健康に留意して増々学業に励んでください。

正しくは「益々」としなければならぬ。

- ②今回の実習は2回目の実習ということで、気持ち的にもゆとりがあったのではないのでしょうか。

「実習」がくり返されているので、正しくは「今回は2回目の実習」としなければならぬ。また「気分的」という表現はあるが「気持ち的」はないので、正しくは「気持ちの上でも」としなければならぬ。

- ③少し距離をおいて話しかけたり関わってくれたので、とても良かったです。

「たり」が一か所しかないので、後ろもつけて「関わったりしてくれたので」としな

ければならない。「です」の接続もおかしいので、正しくは「良かったと思います」としななければなりません。

- ④部分実習をした日の夕方、自分で作った作品をうれしそうに親に見せたり話している子どもが何人もいました。きっと楽しかったんだらうと思います。

正しくは「話したり」「楽しかったのだらう」としなくてはならない。

これは、学生の日誌に書かれていた実習園の先生のコメントの一部だが、さらに驚くような事態も発生している。それは、学生が「絵本の読み聞かせをもっと練習しようと思います」と書いた文章に対して、ご丁寧にも赤ペンで「練習したいです」と直してあったことである。間違っていない大学生の文章をわざわざ小学生が書いている「タラちゃん言葉」に直す保育者がいることに驚きすら感じた。

- (2) 現職保育者の学会発表テーマにみられる問題の事例

さらに、次のような事例もある。数年前の日本保育学会で発表された論文をたまたま『日本保育学会大会研究論文集』で見つけたのだが、「いじめられることについての実践的考察」という表記があった。いわゆる「ラ抜き言葉」が若者の間に定着していることは周知のとおりであるが、「ラ抜き言葉」はまだ日本語として認知されてはいない。会話では容認するとしても文章には書かないことになっている。それが発表題目として表記されていたのである。しかも、連名の発表者の中にはその園の「指導的な立場にある」と思われる人の名前も記されていた。

保育者は、子どもの「言葉の先生」として、文章だけでなく日常の話し方にも注意しなければならないはずである。「学ぶ」の語源は「まねぶ」とあると言われるが、その意味は「まねをする」こ

とである。子どもが言葉を覚える際のお手本は、常に身近に存在する親であり保育者であるのだから、その立場を自覚しなくてはならないが、学生が話している言葉はむしろ「反面教師」といった状況である。大人なら批判的に受けとめられるが、子どもの場合は無条件でまねをしてしまう。けれども、会話については授業中に指摘するしか方法がない。

#### 4. 学生に対する作文指導

保育者の仕事の中心は子どもを保育することであるが、保育は「意図的な営み」と言われるように、その活動は思いつきで行うわけではない。そうではなく、「ねらい」や「目的」をもって展開されている。また、保育者だけが子どもの発達の援助をするのではなく、保護者と連携することが重要である。こうしたことを考えると、指導計画(指導案)を書いたり活動の結果や反省点・子どもの発達を記録したりすることは、よりよい保育活動を行う上で重要な意味を持っていることがわかる。また、連絡ノートや園だより等によって保護者と情報をやりとりすることも、発達の援助に一貫性を持たせる上で大切なことである。このようにみえてくると、子どもとかかわることが中心の保育者であっても、文章を書く力が求められることが理解できるであろう。

- (1) 作文指導の方法

そこで、このままにしておくわけにはいかないので「日本語の表現法Ⅲ」では、8年ほど前から毎週の課題提出を義務づけている。それ以前にも「文章作法」や「日本語表現」という授業を担当していたのであるが、初めの数年間はテキストに示されている正しい文章の書き方や間違った事例を説明しながら授業を進めていた。その理由は、当時の学生には高校を卒業するまでにそれなりの文章力がついていたのである。ところが、10年

ほど前から既に紹介したような状況になってきた。そのため、テキストで事例を示しながら正しい表現法を説明しても、実際に学生の作文を読むと、正しく書ける学生は数えるほどしかいなくなってしまうのである。

しかも、学生間の能力差が拡大して、一律の指導にも限界を感じるようになってきた。わかっている説明を聞く学生は退屈そうであるが、その一方でわかっていない学生にはしっかりと説明しなくてはならない。そこで始めたのが全員に課題文を課してそれを添削する方法である。この方法ならば、学生の力量に応じた個人指導ができる。また、この教科は別の担当者が1年生の前後期を通して「日本語の表現法Ⅰ」と「日本語の表現法Ⅱ」を必修科目として担当し、文章の書き方を丁寧に説明していることも作文指導を取り入れる背景になっている。

ただし、担当者がレポートを読むという作業に追われることは言うまでもなく、現在は400字の原稿用紙を毎週220枚ほど読んでいる。参考までに方法と主な課題（テーマ）を示しておこう。

- ①学生が書いた文章は必ず読んだ痕跡が残るようにして次の授業で返却する。
- ②表現が間違っている部分には赤ペンでチェックをする。特に必要がある場合にはコメントを加えることもある。
- ③基本的にはチェックするだけで、訂正は学生にさせる。その理由は、担当者が直してしまうと学生は何もしないからである。
- ④学生が訂正しているかどうかを確認するために、何回かレポートがまとまったところで再提出を求めている。
- ⑤チェック部分の訂正方法がわからない場合は研究室に質問に来るように伝えている。
- ⑥半期で15回のレポートを提出する。根気よく続ける習慣づけというねらいもあるので、1回でも提出しないレポートがある場合には単

位の認定をしないと伝えてある。これは毎年実行しているので、上級生からも厳しさが伝わっている。

- ⑦真剣に訂正させたり質問にくるように促したりするために、訂正が間違っている場合には再提出の際に減点すると伝えている。
- ⑧特に大きな間違いがない場合には、氏名の下に赤で○をつける。15回の提出後に○の総数が成績に影響することも伝えている。

## (2) 作文の課題（テーマ）と「ねらい」

作文の課題は毎回の授業終了時に示しているが、その課題は大きく二種類である。ひとつは学生自身に関する課題を出している。その理由は自分を見つめてふり返りの機会を作るためであり、将来の生き方を考えさせるためでもある。こうした課題を出すことにより、進路を考えることや面接の答えにつながるのではないかと考えている。もうひとつは社会のできごとに関する課題である。特に、保育や子育てに関する問題意識を持たせることを意図しているからである。

今年度の具体的なテーマとして、自分自身に関しては次のようなものがある。

- ①私の長所と短所
- ②私の弱点とその克服法
- ③三十年後の私
- ④私の苦手なこと
- ⑤一生懸命に取り組んだこと
- ⑥苦手な人と同じくクラスの担任になったら
- ⑦私の健康法

また、社会の問題に関するテーマは次のようなものがある。

- ①少子化と日本の将来
- ②幼児の虐待について
- ③夫婦共働きについて
- ④赤ちゃんポストについて
- ⑤男女平等について
- ⑥大学生の学力低下について

- ⑦実習を体験して思ったこと
- ⑧モンスターペアレンツについて思うこと
- ⑨学校におけるいじめについて

作文のテーマは毎年同じものにしてはいるのではなく、重大な事件や社会の関心を集めたできごとやクラスの雰囲気によって変えているが、基本的な方針は上に示したようなものにしてはいる。このような課題で作文を書くことによって、それまで社会のできごとにほとんど関心を持たず、自分と向きあうこともなかった学生が次第に自分のことを考えるようになり、社会の問題にも目を向けるようになってくる。

### (3) 作文指導の留意点

こうした方法をとる上で大切な点は、担当者が「本気である」ことを学生に気づかせることである。特に、1回目の授業で示した上記のような「拘束」は確実に実行し、学生との間に良い意味での緊張関係を保つことが重要である。一度決めたことを守らないと、学生がだらけるのをとめることはできなくなる。もちろん、初めのうちは毎週課題を提出することに対する拒否反応が強いことは当然である。それは、本学に入学してくる学生の多くは、中学・高校時代に家庭でコツコツと学習を積み重ねた経験がないからである。恐らく、これまでは嫌いなことをしなくても見過ごしてもらえたのであろう。

このことは、年度は異なるが、課題を提出することについての次のような感想からもわかる。だが、社会に出れば、自分の好みに関係なく「しなければならないこと」がいろいろある。特別に無理を強いるのではなく、「しなければならないことはどんなことがあってもする」という経験が必要と考えている。価値判断の基準が「楽しいか楽しくないか」にある学生にとっては苦しいことかもしれないが、そこを避けてはいつになっても幼児的な考えから卒業できないと考えている。

### (4) 作文に拒否反応を示す文章の事例

- ①私は毎週作文を提出するという課題を聞いて、とても嫌だと思いました。
- ②私は文章を書くのは好きではない。そのため、毎週作文を提出するという課題はものすごく苦痛なものでしかない。
- ③私は先生から課題のことを聞いて、どうして書かなければならないのか疑問に思いました。何度も書く理由がわかりませんでした。
- ④私は毎週課題を書くことについて、正直、やりたくないと思っています。
- ⑤毎週課題を出すということを聞いて、何でこんなに面倒くさいことをしなければならないのかと思いました。
- ⑥最初の授業で毎週課題を提出すると聞いて、最悪だと思いました。

このように、最初は否定的で拒否的な反応を示す学生がどのクラスでもかなりの割合で存在する。もちろん、保育者にとって文章を書くことが避けられないことや学生の文章力が満足できる状態でないことについて時間をかけて説明した上でこのことである。しかし、最初は拒否反応を示しているものの、丁寧にチェックして次の授業で返却することを繰り返すうちに、その意味を理解する学生も出てくる。

### (5) 肯定的に受けとめ始めた学生の文章例

- ①最初の授業の際に毎週レポートを書くことを知り、とても嫌だと思いました。しかし、三回授業を受けて少しずつ考えが変わってきました。レポートを書くことが嫌であることは変わりませんが、これもすべて自分のためだと思えるようになりました。
- ②たしかに毎週必ずレポートを書くというのは大変だが、保育者になれば指導案や連絡ノート等、今よりも文章を書くことが多くなる。指導案も連絡ノートも他人に向けて書く文章

である。他人が理解しやすい文章に、素早くまとめて書くことが必要になる。そう考えると、今のこの課題はそれほど大変ではないと感じられる。

この様な学生が出てくると、それほど時間が経過しないうちにその数が増えてくる。

#### (6) 作文の提出を続けた後の学生の感想

次に示すのは、15回の授業をふり返った学生の最終課題文「添削指導を受けて思ったことと今後の課題」の一部である。

- ①授業の中盤頃には、週に一枚の作文ごときに焦っている場合ではないと思い始めました。保育者になれば保護者の目に触れる文を書かなければならないのですから、別の焦りも生じるでしょう。限られた時間で伝えたいことをまとめるのは難しいことです。しかし、後半になると、文をまとめるペースが速くなり、数をこなしてきただけの甲斐がありました。また、〇がつくこともあり、とてもうれしく思いました。
- ②先生は文法や文字だけでなく内容も丁寧に見てくださっていることにも気づきました。第9回と第11回に先生のコメントが記載されていますが、それぞれ私が真剣に内容について考えた回でした。特に虐待については温かいお言葉をいただき、励みになりました。
- ③私にとって、この授業は大変でしたが、現場や社会に出てから必要な知識を身につけることができました。困らせるような文を書きましたが、丁寧に指導をしてくださり、ありがとうございました。
- ④課題文のテーマについて考えることで、以前よりも社会のことがらについて目が向くようになりました。また、自分の考えを書く場合には自分と正面から向きあわなくてはなりません。私は自分と向きあうことが苦手ですが、

課題について書いているうちに自分の考えがまとめられるようになりました。

- ⑤私が添削指導を受けて思ったことは、努力をすれば変われるということです。作文を書き始めた頃は、用紙を埋めることに必死で、文章の構成や言葉の表現などを正しく書くことができませんでした。しかし、添削された文章を見直し反省することで、自然と正しい文章が書けるようになっていました。私は文章を書くことが苦手でしたが、添削指導を受け、〇がもらえるまでに成長することができました。今は文章を書くことに苦手意識はありません。この添削指導を通して、苦手なことにも取り組むことの大切さを学びました。文章を書くことだけでなく、自分の苦手なことに積極的に取り組むことができる大人になりたいと感じました。
- ⑥最初はこの授業で本当に文章力がつくのか、文章力がある人だけが得をする授業なのではないのか、と不安感を持っていました。しかし、先生は毎回毎回、文章力のない私に赤ペンで添削をしてくださって、この授業が終わる今、自分の文章力のなさ、知識のなさに驚きますが、自分自身の弱点が理解できて本当にためになる授業だったと思います。そして、回数を重ねるごとに赤ペンの部分が減って来ているように感じます。今回、添削指導を受けて自分には良い文章なんて書けないと諦めていましたが、徐々に文章を書くことに慣れて、好きとまでは言えませんが自信がつき、嫌いではなくなりました。
- ⑦先生は何クラスも見てすべての作文を読み、添削しているのだと思うと、授業以外でも私たちのために時間を使ってくくださり、本当に学生思いの先生だと思いました。先生が少しでも作文が読みやすくなるよう、丁寧にきれいに字を書くよう心がけたり、前回間違ってしまった部分は今回間違えないようにしたり

しようと思いました。

これらは担当者が読むことを前提に書いているのであるから、その感想はある程度差し引いて受けとめなくてはならないが、初めは書くことに疑問を感じたり拒否反応を示したりしていた学生に変化が出ていることがほとんどすべての学生の作文から窺える。

さらに、作文を添削するだけでなく、提出された作文の中から多くの学生に共通してみられる間違った表現や事例としてふさわしい文章をピックアップした「例文集」を作成して配布し、授業中に全員でその訂正を行っている。例文集は毎年、半期で10枚～15枚程度になる（A 4版1枚に10～14の例文を掲載）が、そのプリントの一例を紹介しておこう（註1）。

それに加えて本年は、筆者がある保育団体の機関誌に1年間連載した「話すことと書くこと」（全12回：1回分は約1500字）という記事も読みながら、文章を書くことや話すことについて重要と思われることがらの解説を行った。

こうした試みを続けることで、わずかではあるが学生に変化が起こっていることが感じられる。それは、文章を書くことに対するアレルギーが薄れたり、保育者になるためには文章を書くことが不可欠であるから表現力をつけなくてはいけないと考えるようになったりすることである。

ただし、初めにも触れたように、保育者として求められるレベルまでの文章力がすぐに身につくわけではない。それは、次の(7)「半年間の練習でもなくなるおかしな文章表現の事例」で一部を紹介したが、最終回（15回目）の課題「添削指導を受けて思ったことと今後の課題」からも明らかである。半期の授業で、文章を書くことをある程度は肯定的に受けとめるようになってはきたものの、依然として訂正しなくてはならない表現が数多く見受けられる。

## (7) 半年間の練習でもなくなる「おかしな文章表現」の事例

①添削指導を受けて思ったことは、私は文章力がないと思いました。他の友だちは○をもらっていたのですが、私はひとつも○をもらえませんでした。その原因は私が努力を怠ったからです。友だちに聞くと、毎回添削してもらった文章をもう一度読み、どこが間違っているかを確認してから次の課題文に取り組んでいると話していました。私は復習をしないまま作文を書いていたので、○がもらえなかったのだと思います。

「思ったことは」という主語に「思いました」はつながらない。正しくは「文章力がないということです」としなくてはならない。

ただ、この学生は表現力は十分でないものの、自分と向きあって正しく書けない理由を分析することができているので、もう少し時間があれば正しい文章が書けるようになると思われる。

②私が保育者になったとき、子どもたちが間違った日本語を覚えてしまわないように気をつけたいです。

相変わらず「気をつけたいです」という小学生の表現が登場している。

③初めはこんなに毎回課題を出して、私たちは作文を書いて一体何になるのだろうと思っていたのですが、いざ作文を書いて添削してもらおうと、自分の日本語を書く力のなさに気づくことができ、ほんのわずかかもしれませんが、前よりは正しい日本語を書くことができるようになりました。大学生になるとなかなかこのような機会はないと思うので、毎回添削してくださった先生には感謝しています。なので、これからたくさん文章を書いて、今後はおかしな日本語を使わないようにしたいです。

正しくは「以前よりは」としなくてはなら

ない。また、相変わらず「なので」や「したいです」という表現をしている。一度覚えたことを変えるには相当なエネルギーを必要とするのであろう。

このほかにも、間違った文章はたくさんあるのだが、ほとんどの学生が文章を書くときの表現に注意を払うようになっていことがわかる。これは大きな変化であり、15回の作文をやり遂げた成果と言えるのではないだろうか。

## 5. 作文指導の結果と考察

作文の指導を通して次のようなことがわかった。

①学生に示した提出や返却の「約束」を守ることが重要である。約束を守らないと担当者に対する学生の信頼感がうすれ、授業担当者の本気度が伝わらない。すると、学生の取り組み方もいいかげんになってしまう。

②担当者が上から目線で「このように書きなさい」と指示するのではなく、学生自身に気づかせることが重要である。

それは15回目の作文に、

「努力すれば自分が変わることがわかった」  
「初めは原稿用紙を埋めるのに何時間もかかったが、最後の方は書く時間が短くなってきた」

「作文をくり返すことで社会に目を向けるようになった」

「自分を見つめるようになった」

という記述が数多く見られたことから窺える。

また、短大に入学する前の学習指導のあり方にも問題があることがわかってきた。たとえば、大人になったら「がんばりたいです」や「楽しかったです」といった表現をしないことを教えてもらったことがない学生が非常に多いことである。そのほかにも並列の「たり」はすべてにつけるこ

とや「私が思ったことは」という主語には「～ということです」といった述語がつながることなど、基本的な文章表現の仕方を習ったことがないという学生があまりに多いことである。

保育の授業で頻繁に登場する「発達」の「達」の「つくり」が「幸」と書かれている作文が何枚もあったのでチェックして返却したところ、「どうして間違いなのですか」と質問に来た学生がいた。「達」の「つくり」が「幸」ではなく「土」と「羊」であると説明したところ、その学生は「私は中学・高校時代にいつも『幸』と書いていたのに、それを指摘する先生はいなかったので、これが正しいと思っていた」と話してくれた。ひとつの事例だけから結論づけるわけにはいかないが、学生の文章力があまりにも低いことを考えると、小中学校や高等学校における学習指導が適切かどうかの検証も必要になってくるのではないだろうか<sup>(註2)</sup>。

さらに、一年生の「保育者論」の授業では、学生が書いた課題文10回分（1人につき10枚、合計で約2,300枚）を再チェックして頻繁に登場するいくつかの表現について使用頻度をまとめてみた。その結果は次のとおりである。

①主語と述語のつながりが不適切な文章を書いている学生数は93名であった。

【例文】 私が教育について考えたことは、子どもは生活をしながら自然と生活上のルールが身についていくが、それだけでは知識を増やしていくのも難しいことだとわかった。

保育者論の授業を受けて、後期の授業で初めての授業でした。

良かった点では、日誌の字がきれいだと言われた子が何人かいて、私は時間に追われて書いてしまいました。

②話し言葉で書かれている部分は314か所であった。

【例文】 実習は大変だったけど、やっぱり学ぶことがいっぱいありました。

もっと積極的に質問したり話しかけたりするんだっとなあと思いました。

子どもと遊んでると楽しかったし、ちゃんと準備をしとけばもっとよかったです。

③文の初めには使わない「なので」が書かれている文章は108文あった。

[例文] なので、次の実習ではもっと頑張りたいです。

なので、なんでも援助してはいけないのだということがわかりました。

なので、今回の実習では、より積極的に行動して多くのことを学びたいなと思いました。

④いわゆる「タラちゃん言葉」の「～たいです」という文末表現は430か所であった。

[例文] 保育者になる夢をかなえるためには、ふだんの授業をしっかりと受け、実習で積極的に行動できるようにしたいです。

これからの課題は、責任実習に向けて、自分を改善できるようになりたいです。

今日は初日だったので、園の生活についていくのがやっとでしたが、明日は積極的に子どもとかかわり、活動していきたいです。

⑤並列を表す「たり」が不適切で片方しか使っていない文章が163か所あった。

[例文] 私の方から積極的に子どもたちと関わったり、活動の中で保育者らしく接することができなかったので、今後はその点を改善して頑張っていきたいです。

先生の姿が見えなくなったり、もう一人の子の世話をしていると不安になっていましたが、うまく対応できませんでした。

ピアノもしっかり練習して、園児と楽しく歌ったりできるように練習したいです。

⑥いわゆる「ラ抜き言葉」が使われている文章は17あった。

[例文] ふだんの実習ではなかなか見れない場面を見ることができて良かったです。

給食で嫌いなものが出たので、食べれませんでした。子どもに影響するので、次の実習までには好き嫌いをなくしたいです。

## 6. 文章力を低下させる現代社会の問題

もちろん、こうした問題は本学の学生だけでなく、多くの大学生や短大生に共通している。それどころか、現代人の文章力そのものが全般的に低下しているように感じられる。その代表がNHKの放送である。私は以前「NHKのニュース原稿を聞いて文章の練習をするように」と学生に勧めていた。特に、ニュース原稿を聞きながら瞬間的に接続の言葉を連想することが、文と文をつなぐ接続詞を考えるために役立つからである。ところが、最近のNHKのラジオやテレビから聞こえてくる言葉にはかなり問題が多くなったように感じられる。

そのひとつは、並列を示す「たり」を片方にしか使わない場合が多いことである。さらに、いわゆる「説明文」における主語と述語のつながりが適切でない場合が多いことである。具体的に示してみよう。前者の事例では、

「台風のため、〇〇航空では×便が欠航したり欠航を決めました」

という表現が多いことであり、特に複数の予報士が担当している気象情報に関しては、

「雨が降ったり強い風がふくでしょう」

といった表現が日常化している。また、後者の事

例としては、

「昨日、〇〇市で××の説明会が開催されました。この説明会は〇〇市が主催しました」という言い方が非常に多い。なお、初めに紹介した事例では「×便が欠航したり欠航を決めました」「雨が降ったり強い風がふいたりするでしょう」が正しく、後の事例では「〇〇市が主催したものです」としななければならないはずであるが、こうした表現をするアナウンサーやキャスターが多くなっている。

放送といえば、最近は視聴者が参加する番組が多くなり、手紙やメール・ファックス等によってどの局にも視聴者からの意見が多数寄せられている。視聴者が自分の意見を言うことは歓迎すべきことであるが、そこで紹介される文章は必ずしも正しい日本語表現ではないということである。というよりも、文章の書き方としては間違いが多いと言わざるを得ない。一日中どこの放送局からも視聴者の意見が次々に紹介されているため、正しい文章か否かがわからなくなっているのではないだろうか。

さらに、若者の間に定着しているメールも文章を書かなくする大きな原因と考えられる。そのため、手紙や葉書の書き方がわからず、学生に「実習のお礼状を書くように」と指示すると、どうしたらよいかかわからずに右往左往している姿をよく見かける。年賀状すらほとんどの学生には無縁なものとなった。しかし、社会人になれば手紙を書くことも少なくないので、授業で正しい葉書や封書の書き方を説明している。

## 7. おわりに

保育者になったからといって、子どもと関わるだけが仕事ではない。正しい文章を書くことや正しい言葉遣いをすることは当然である。ところが、現実には社会の変化の中で文章を書く機会が少なくなり、平成元年に導入された「ゆとり教育」や

学校5日制に伴って小中学校での作文指導も十分ではないようである。そのため、大学生になっても正しい文章を書く力が育っていない。それと並行して「名ばかり大学生」という言葉が創られ、大学生の学力低下や<sup>(註3)</sup>就職内定率の低下が社会問題になってきた。

それどころか、大学教育そのものが成り立たない状況が生じてきたため、新入生に対して高校の補習教育を行う行わざるを得ない大学が増加している。また、現在は大学の授業内容が公開されるようになったが、ある大学では外国語科目(英語)の授業が中学1年生程度の基礎的な内容であるということになってきている。しかし、これまで述べてきたように、高校の補習どころか、小中学生レベルの文章指導からやり直さなければならない学生が少なくないのが現実である。

日本では、それまでの教育が知識重視の詰め込み教育であるとして学習時間と内容を減らし、2002(平成14)年度から学校の完全5日制とともに経験重視型の教育方針にもとづいたゆとり教育をスタートさせた。学力低下がすべて「ゆとり教育」の結果であるかどうかはわからないが、学生の文章力が驚くほど貧弱であることは間違いない。それでも、(保育者として)社会に出れば文章を書くことが必要になり、仕事を続けようとするならば、そこから逃げるわけにはいかない。

それにもかかわらず、学生の多くはそうした事態に気づいていない。筆者はなんとか卒業までに最低限の力をつけたいと考えて、学生に疎まれながらも作文指導を続けている。中には、実践すればただの結果が還ってくることに気づいて意欲が高まった学生もいる。だからといって、すべての学生が間違いのない文章が書けるようになったというわけではない。何度も文章を書き、それを第三者にチェックしてもらって自分で訂正することをくり返すしか、文章力を向上させる方法はないのである。ゴールははるか遠くにかすんでいるが、これからも試行錯誤を続けていこうと考え

ている。

(註1) 今年度に作成・配布した例文集(約15回)の一部を紹介しておこう。

①【日本語の表現法Ⅲ例文集⑥「実習日誌」から(平成24年度)】

- A 今日は初めての实習と言うことでとても緊張しました。そのせいか最初はあまり子どもたちともなじみず戸惑っていました。なので、自由遊びの時年長さんや年中さんの子どもたちが「いっしょに遊ぼう」と言ってくれたので、子どもたちに助けてもらい情けなかったです。
- B 実習の時の印象がとても強く残っていたので、子どもたちの顔を見ると、半年前のようすが浮かんできたりこんなに大きくなったんだと子どもたちの成長のようすが驚きました。
- C 今回の保育園実習は、私にとって初めての保育園での実習となりました。
- D リズムが始まると顔つきが違くなり、とても真険で集中している姿も見ることができました。また、新しい歌も興味深々に聞いて覚えていました。
- E 風のため、二日も休んでしまい、すいませんでした。
- F 今日は朝から雪が降り、寒さに負けずに子どもたちは元気に喜んでいました。
- G 今日で一歳児の実習は終わってしまいましたが、一日の流れや毎日の給食、散歩など、子どもたちと過ごす日々はとても楽しく充実していました。
- H 子どもたちは一生懸命に話かけてくれました。
- I 土曜日の一斉保育は子どもは少ないけど、そのため一人一人と関わる時間が普段の保育よりも多くなります。
- J 四日目の実習はつき組で勉強させていただき、はな組との援助が変わり戸惑うことが多かったです。
- K 子どもの見る力聞く力は想像していた以上にすごいことを知りました。絵本も読んでいる途中に次の内容を言ったり先生がやってくれているように絵本を持ち読みまねをしている姿が多く見れました。

- L 今日は必ず全員とお話をしようと目標を決め実習に望みました。
- M 悔しくて泣いちゃう子がいたり子どもは本当に素直に気持ちを表現するなあと思いました。
- N 緊張したけど、みんな子どもが反応したり応えてくれて良かったです。

②【日本語の表現法Ⅲ例文集⑨(平成24年度)】

- A その中で気づいた私の課題は、積極性・行動力が必要だと思いました。
- B 例えピアノが上手でも、それをする行動力がなければその技術は無駄になってしまうと思います。
- C これからの課題は、責任実習に向けて、自分を改善できるようになりたいです。
- D この課題を改善して実習に望みたいです。
- E ピアノもしっかり練習して、園児と楽しく歌ったりできるよう練習したいです。
- F 実習を終えて、先生方にも積極性がないと言われたのですが、子どもに自分から積極的に話掛けることができなかつたり、子どもが話掛けてきて話はするけど、すぐに会話がとぎれて話を展開することができないなどの反省点に気づきました。
- G そのためには、ふだんの授業をしっかりと受け、実習で積極的に行動できるようにしたいです。
- H 子どもたちの前で手遊びと紙芝居を読ませていただくという貴重な機会をいただきました。
- I 観察実習だからといって、自主的に絵本を読むことはありましたが、誰かに読み聞かせをすることはありませんでした。
- J 先生方はとても優しく親切に指導していただき、丁寧に教えていただきました。
- K 先生から積極的に子どもと関わっているねと誉めてもらいました。うれしかったし、とても勉強になったので次の実習でも頑張っていきたいと思いました。
- L なぜなら、挨拶はみんなにすることによって気持ちも伝わるし、言った側も言われた側も悪い気持ちになんかならないと思います。
- M 私は実習に行つて、色んなことに気がつきまし

た。

- N 子どもと関わる中で、声は必要不可欠なものです。
- O 私の文章力のなさはふだん親聞を読まないこと、苦手を避けてきたことが原因だと思います。

③【日本語の表現法Ⅲ例文集⑫（平成24年度）】

- A 短大に入学して勉強していくうちに、私は幼稚園に就職したいという希望があります。
- B 私が保育学科に入学した理由の一つに、私が幼稚園の時の先生にあこがれていたからです。
- C 気がついたら、先生みたいな保育士になりたいと思うようになりました。
- D もうひとつの理由として、母園では全学年でキリストのお生まれを表現する劇をします。
- E 先生の話では、入所したときはそうではなかったと言っていました。
- F 人間関係の基礎を培うということは、日々の生活やあそびの中でさまざまな体験をし、人と関わる力をつけていくことが大切です。
- G 私が編入を希望する理由は、もっと幅広く深く勉強したいと思い、希望しています。
- H 私は就職先について今だ検討中です。
- I 私は就職先について未だ検討中です。
- J 私が幼稚園を希望する理由は、自分が幼稚園出身であり、先生の優しい姿を見てあこがれを持っていました。
- K 自分の希望が実現できるように、これから実習を頑張ることと、幼稚園教育要領についてしっかりと学んでいきたいと考えています。
- L 好奇心旺盛な私にとってもあっている仕事だと思いました。
- M 実習で気づいたことですが、私は長時間保育が苦手だということに気づきました。
- N 私の目標としている先生は、私が中学一年生の職場体験の時に優しく指導していただきました。

(註2) このことに関しては以前に触れたことがある。拙稿「保育科学生の記事表現力について」(育英短期大学研究紀要第19号：2002年2月70ページ)、拙稿「保育者をめざす学生の基礎学力と生活習慣——文章表現に見える問題点を中心に——」(育英短期大学研究紀要第25号：2008年2月72ページ)参照。

(註3) こうした問題に関しては様々なところで取り上げられている。

たとえば、日本経済新聞の連載「ニッポンの教育」には「学ばない症候群：意欲ないまま大学・社会へ」というタイトルで「一部の大学は学習内容の見直しを始めた。文部科学省によると、高校レベル以下の教科を補習する大学は全国で23%、湘南工科大（神奈川県藤沢市）に今春できた学習支援センターの教室では、大学生が中高レベルの数学や理科を学ぶ」と記している。(日本経済新聞：2006年12月5日)

また、読売新聞連載の「大学の實力」には「入学前の補習もはや常識」と題して「入学後の補習の実態を尋ねたところ、一部で施行中まで含めると、回答した大学の46% (228校) が実施していた。入学前に実施する大学はさらに多く、66% (327校) になる。入学が決まった高校生に前倒しで教育を行うことが、半ば大学の常識となりつつあるのがうかがえる」と記されている。(読売新聞：2009年2月10日)

一方、教育再生懇談会は、第7回会合で第3次報告の中に「大学全入時代の教育の在り方について」として①危機に立つ大学教育②大学教育の質を担保する等を盛り込んでいる。(教育学術新聞：2008年2月18日)

〔2012年11月30日 受付〕  
〔2013年1月10日 受理〕